

集団討論後のフィードバックが集団討論に対する自信に与える影響

— 自閉症スペクトラム指数との関連から —

○山本 文枝¹・西川 ひろ子²・西 まゆみ¹

(¹安田女子大学心理学部, ²安田女子大学教育学部)

問題と目的

大学生にアクティブ・ラーニングを応用した「シンクペア」(2人組で話し合う)を実施したところ、相手からポジティブフィードバックを受けた群において自閉症スペクトラム指数(以下、AQ)が高いほど「他者受容」得点が高く、「自己閉鎖性」得点が低くなる傾向が見られた(山本ら, 2020)。このことから、ポジティブフィードバックを受けることで、AQが高い大学生ほど、より相手に対して心を開く方向へ心理的な変化が生じた可能性が考えられた。そこで本研究は、ポジティブフィードバックの与え方に着目し、集団討論における行動に対する自信およびAQとの関連で検討を行った。具体的には、集団討論後にメンバー相互で「よかったところをほめてください」と教示する群と、「態度や行動についてほめてください」と教示する群、単に「ふりかえりフォームに記入し送信してください」と教示する統制群を設けて比較検討を行った。

方法

研究協力者: 教員を志望する女子大学 3 年生 38 名, 平均年齢 21 歳。このうち分析対象者は, 事前調査と事後調査の両方に回答した 28 名。

調査時期: 2024 年 3 月。

集団討論の方法: 1 回 15 分。週に 1 回を 3 週間実施し, 合計 3 回実施した。話し合いのテーマは, 1 回目「防災のための地域との連携」, 2 回目「親の懲戒権について」, 3 回目「保育士の魅力を小学生に伝えるにはどうしたらよいか」であった。

条件: ほめ群 (9 名), 行動態度ほめ群 (10 名), ほめなし群 (9 名) の 3 条件であった。

事前・事後調査の項目: ①自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版(若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004)50 項目 4 件法を事前調査のみ行った。②コミュニケーションに対する自信を測定する尺度 (Self-confidence in Communication Scale) (畑野, 2010) を集団討論に参加する場合を想定して回答してもらった。「意図伝達」, 「意図抑

制」, 「意図理解」の 3 因子であった。

ふりかえりフォームの項目: 毎回の集団討論後にすべての群に自由記述を Google フォームで送信してもらった。項目は, 「取り組んだと思う行動」, 「次回目標としている行動」, 「全体を通しての感想」であった。

結果と考察

(1) コミュニケーションに対する自信得点

各因子において実施前後と条件の 2 要因分散分析を行った結果, 実施前後の主効果のみ有意であった。すべての因子でどの条件においても実施後の得点が有意に高くなっていたことから, 集団討論を実施したことの効果はあったと考える。しかし, AQ と各因子には有意な相関はみられなかった。そこで, 各群の AQ 最高者と最低者とで比較をしたところ, 「ほめ群」と「行動態度ほめ群」では, 前者の事前事後で変化がみられる傾向があった(特に「意図抑制」因子)。「ほめなし群」では両者にあまり変化がみられない傾向であった。

(2) ふりかえりフォームのテキスト分析

「取り組んだと思う行動」と「全体を通しての感想」の共起ネットワークをそれぞれ作成したところ, ほめる 2 群の間に違いは見られなかった。また, ほめる 2 群はどちらも「雰囲気」「傾聴」という語のグループが生成されたが, ほめなし群ではなかった。このことから, 相手をほめるためには相手の話をより集中して「傾聴」する必要性が生じ, メンバーは集団の「雰囲気」をより重視した可能性が考えられた。一方, ほめなし群は, 司会やタイムキーパーなどの取り組んだ役割の語が検出されていた。また, 「全体を通しての感想」では, ほめる 2 群において「自分」, 「意見」, 「伝える」, 「できる」を中心とした語の大きなサイズのグループが生成されたが, ほめなし群ではみられなかった。集団討論後のメンバーからのポジティブフィードバックにより, 自分の意見を明確に伝えることができたことが実感として感じられ, 印象に残った可能性が考えられた。